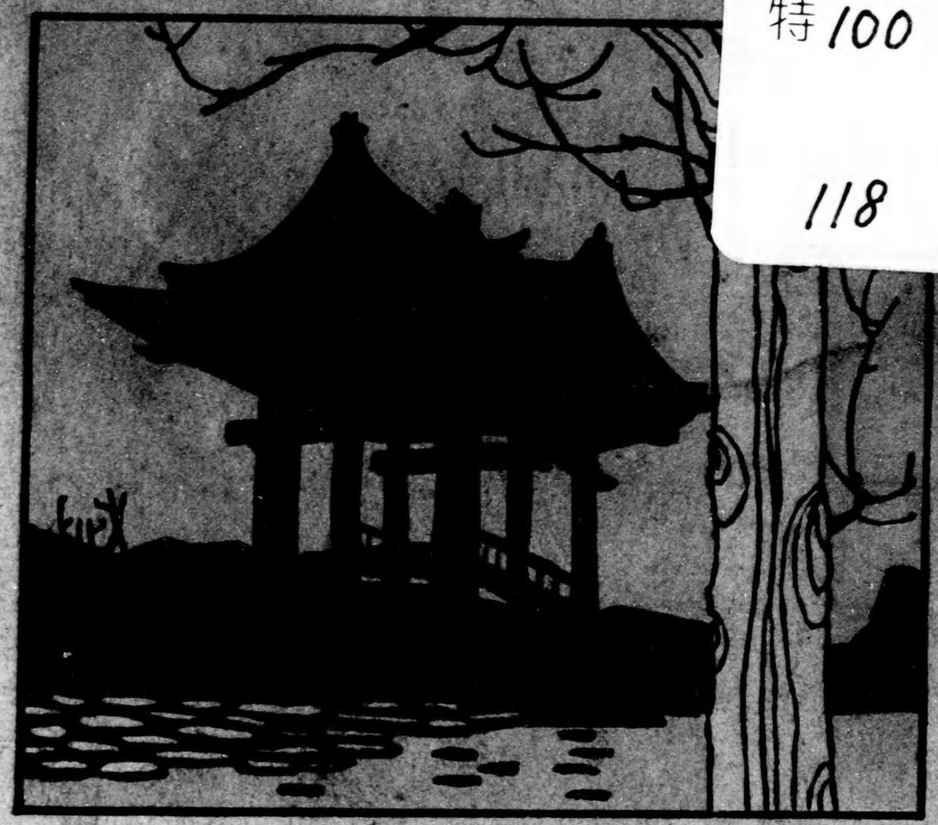
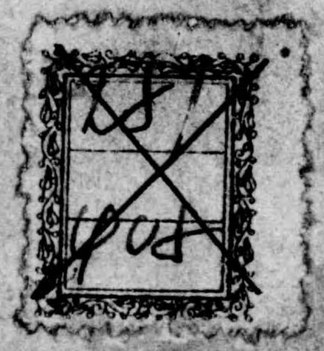


教宗と想理の生人

特100

118



始

特100
118

帝國圖書館藏

マスター・オブ・アーツ
谷川義男著

人生の理想と宗教

親鸞主義トラクト第一編

大正
9.4.16
内交

目次

一　人生に理想なきか
二　快樂主義と理性主義
三　道德的自我の實現
四　個人と社會
五　人間生活と宗教生活

人生の理想と宗教

マスター オブ、アーツ
谷川義男

一　人生に理想なきか

世に刹那主義を標榜する人々がある。人生の理想など云ふことを非常に嫌ふて、現在の瞬間を樂めばよい、人生を通じての目的或は理想などあるものでない、うんなことは道學者輩の空論であると云ふて居る。吾々の一生には、果して何等の目的もなく、又一定の理想もなく、唯漫然と現在の瞬間を樂めば善いものであらうか。世間一般の人々は斯かる問題

に對して格別考慮する所がある樣に見わぬ。さりとて強ち人生の理想を否定して居る譯でもない。世人が此問題に就て深く思慮を運さないのは畢竟彼等が人生の意義及び價値を明かに意識せない爲である。若し人生の意義及び價値を明かに知つたならば、吾人は眞面目に此問題を考へずには居られない。人類は理性的且つ道德的の動物であると云はれて居る。人が自己の理性的たり道德的たることを自覺するときには、おのづから「人生の理想とは何ぞや」の問題に想到せざるを得ぬであろう。

人類の理性的動物であるといふことは、英語のマン(Man人)とマインド(Mind意)が、共に同一の語源から出來て居るのでも明かに知られる。人は考へる力を有するものである、考へる働きは卽ち心意である。

英語と同じ系統に屬する古代言語たる梵語では、人をマヌ(Manu)と云ひ、心意をマナス(Manas)と云ふ、共に「考へる」とか「慮かる」とかいふ意味の語根マン(Man)から出來て居る。ろこで、古來佛敎で、人とは如何なるものなるかを解釋して、「思慮多きが故に之を名けて人と爲す」と云つて居るのは、語學上から見るも最も適當なる解釋であつて吾人の所謂人類は理性的動物であるといふのと、同じ意味に外ならぬ。此の如く人間は思慮を有する者であるから、ろの行爲には必ず何等かの目的を有する。何等の目的もなき動作は衝動と稱すべきものであつて、行爲と稱すべきものではない。人間が思慮ある行爲をなす以上は、ろの生涯を通じて何等かの目的又は理想を有せなければならぬ譯である。此

目的理想が吾人の向つて進むべき目標であつて、日常の云爲行動は皆この目標に近づく所の道程に外ならぬ。道德上善と云ひ惡と云ふも、此理想を標準として判斷せらるゝのであつて、此目的に適ふ所の行爲は善であり、之れに反するものは惡である。果して然らば、かゝる意味の人生の理想は、うれ目身に矛盾もなく、一貫して統一されたるものでなければならぬ、又日常の生活を支配する力强き權威となるものでなければならぬ。卽ち人をして理想うれ目身の實現に努力せしむる所の强大なる力あるものでなければ、眞の理想とは云へないのである。

二　快樂主義と理性主義

人文の歷史を繙いてみると、吾人は人生の理想に對する二つの思潮を見出すことが出來る。卽ち一つは快樂主義で、他は理性主義である。此二つは、古來の哲學者及び倫理學者の主張せる代表的の思想であるのみならず、又實際に於て普通一般の人々が實行して居る生活の代表的樣式である。先づ快樂主義とは如何なるものかといふに、人生の目的は快樂を求むるに在る、吾々は快樂を求めることに努力し、能ふ限り多くの幸福を得て愉快に暮すのが人の道である、善惡の標準も快樂に在りて、快樂を增すものは善であり、苦痛を生ずるものは惡である。これが快樂主義の主張する所である。希臘のデモクリタス、や、エピクーロスの如きは、普通に快樂主義の代表者と見做されて居る。快樂主義は常に唯物論者の

懷抱する意見であつて、今日の如き物質的文明の世の中では、快樂主義の勢力を擅にするのは、當然の結果である。印度に於て釋尊出世以前に盛んに行はれた順世學派の如きは、うの最も極端なるもので、うの主張する所を聞くと、世界は五官に觸るゝ物質の外には何物もない、物質が集合して人間を作り、そこに感覺が生ずる、うれ以外精神あることなく、又現世以外に來世があるのでない、それ故に吾々は身體の存する限り、感覺の欲する所に從つて快樂を追求すれば善いのである、「生命のあらん限り歡樂を盡せ、汝の友より財を借り來りて美食に飽け」これ卽ち人生究竟の目的であると言つて居るが、恰も物質主義旺盛の現代の人心を暴露せるが如き感がある。

次に理性主義といふは、人には理性と感情とがあるが、人の人たる價値はうの理性に在るのであるから、理性の示す所に從つて生活し、感情の支配を免れねばならぬと主張するものである。古代に在りては希臘のストア學派、近世に在りてはカントが好個の代表である。理性を標準として生活する主義は、感情の要求する所の快樂を飽くまで排斥し、世の中の罪惡や不善は理性に背きて快樂を求むる爲に生ずるものとなして、嚴めて嚴肅なる生活を奬勵する。カントの如きは明かに、快樂を得る爲になす所の行爲は、感情に基くのであるから惡である、人の爲さねばならぬ本務である爲に行ふといふ道義心より發する行爲は、理性から來るのであるから善であると云ひ、道德はこの理性から發する所であるから

無上命令であるとまで云つて居る。名利の爲や快樂の爲や、その他別に野心があつて行ふことは、皆これ感情の欲求に外ならぬから、道德的行爲ではない。人の爲すべき本分であるから爲さずに居れぬといふ理性の要求は、人を動かす最も尊嚴なる力であるから、之に無上命令といふ名を與へたのである。基督教僧侶の修道院に於ける嚴肅なる生活と、佛教僧侶の山林に隱遁して修學練行するのとは、頗る能く似た所があるが、共に感情の欲求を禁遏して專ら精神を訓練するのであるから、理性主義を極度に發揮せるものと見て差支へない。

此の如く快樂主義と理性主義は、全く相反する主張であつて、而も何れも人生の理想目的を示して居るのであるが、惜い哉、共に一方に偏し

て中道を得て居ないといふ非難を免がれぬ。何となれば、快樂主義は感情の滿足をのみ求めて、理性といふものを眼中に置いて居ない。又理性主義は、感情と理性とを認めて居るけれども、感情の欲求を抑壓して、專ら理性の支配に委せる。これ明かに人心の一面を偏重して、その要求を滿すことを理想とするに過ぎずして、心の全體の要求を平等に滿足させるものではないからである。吾々の心の內容には、感情もあり理性もあり、又別に意志の働もある。此等の三要素が綜合されて、完全なる協調を保つ所に、所謂道德的自我なるものが成立するのである。故にその一を尊重して他を輕視し、若くは一の爲に他を犧牲にするが如きは、吾人の道德的自我を不具となすものであつて不自然の甚だしきものと謂

はねばならぬ。然らば人生の理想は何處に在るか。快樂主義の如く感情の欲求のみを滿足することでもなく、又理性主義の如く理性の支配のみに從つて嚴肅なる生活を送ることでもない、理性と感情と而して意志の統一體たる道德的自我の圓滿なる實現、これ實に人生の理想たり目的たるべきものでなければならぬ。

三　道德的自我の實現

人間は道德的自我を有する點に於て、動物と異つて居る。動物の動作は、衝動的、器機的であつて、自己の如何なるものなるかに就て何等の自覺を有せない。然るに人間は自己を意識し、內觀省察の精神作用を有

する。而して自己が具備せる諸の性質や才能は、未だ充分に發展して居ないから、自己の不完全なることを認知して、圓滿に之を發展せしめんと努力する。これが即ち道德的自我の實現である。故に人生の目的理想たる道德的自我の實現は、他より强制せられたる要求に非ずして、人間の本性から現はれたる自然の要求である。若し人が自我に具有する諸の性質や才能を圓滿に發現せしめんと努力せないならば、自ら人間の尊嚴なる價値を拋擲して、下つて動物の列に加はらんとするものであると言ふも、決して過言ではない。

吾人は先きに道德的自我は理性と感情と意志との協調によりて成立つものであると云つたが、この三要素は實は截然と區別し得べきものでは

ないが、それ〳〵特別の働きを持つて居るのである。快樂主義者の主張するが如く、人間は快樂や幸福に對して强大なる欲望を持つて居る、之は感情が自然に要求する所であつて、元より卑むべきことでもなく、また壓迫すべきことでもない。唯感情は盲目的であつて、動もすると善惡の差別を考へず、節制を加へて適度を守るといふことが有りにくい。そこで感情を指導する力と、その欲望を節制する力とを必要とする。この必要に應ずる者が、理性と意志とである。理性は冷靜に事理を考へて、善惡を判斷し、適不適を撰擇する力である。意志は目的を定めてそれに叶ふ樣に實行せしむる力である。此の如く三の力が完全なる協調を保つて働くが爲に、統一體としての自我が圓滿にその性能を發現し得るのである。

理性は頭(Head)によりて表象せしめ、感情は心臟(Heart)により意志は手(Hand)によりて表象せしめることが出來る。三のHは、各自に重要なる價値を有して居るのであるから、その間に上下優劣の差別を設けるべきではない。況んや、その一は絶對の權能を與へて他を壓迫するが如きは、最も謂れなきことである。さりとて三のHが各自に勝手な働きをして、寄合世帶の如き狀態であつてはならぬ。第一のHが勝手に高尙なことを考へたばかりでは、机上の空論に終るであらう。第二のH横行濶歩したならば、喜怒哀樂の情に驅使せられて、日夜放縱の生活が耽溺するであらう。又第三のHが自由に活動せば、勞いよ〳〵多くして

功いよ〳〵少く、徒らに奔命に疲るゝに終るであらう。此の如く三のH
が協調を保たずして、自由の行動を取るときは、一人にして三重の人格
を具へるが如き結果となる。世には二重人格や三重人格の人が少くない
が、此の如きは人としての價値を有せざるものである。三のHは必ず協
調を保たねばならぬ、りして有機的に統一されたる一人格とならなけれ
ばならぬ。

四　個人と社會

自我の實現といふことは、自己に具有して居る諸の性能を圓滿に發
現することであるから、卒然として之を聞かば、頗る個人主義に傾いた
思想の樣に思はれるが、併し人の世に在るや、單獨に生活するのでなく
一の社會を作りて共同生活を營んで居るのであるから、自我の實現とい
ふことは社會の存立といふことゝ抵觸する所があつてはならぬのである。
社會は有機的に統一されたる團體であつて、個人はりの成立要素として
りれ〳〵必要なる地位を守りてりの任務に服するものである。故に個人
がりの性能を發揮してりの地位に於ける義務責任を全ふすることは、取
も直さず社會の存立を安固にし、りの進歩發達を計る所以である。
吾人は自己の人格を尊重すると共に、他の人格をも尊重しなければな
らぬ。他人も亦社會の一員として社會を成立たしむべき重要なる任務を
有するのであるから、他人も同じく自我を實現して社會の進歩に貢献す

る所あるべきをこう希望すれ、自分の利益の爲に他人を道具に使ひ、若くは犧牲に供するといふことは、不道德の甚だしきものである。自分と他人とが同じ社會の成員として共同生活を營んで居る以上は、互に人格を尊重して、うの行ふ所の仕事に協調が行はれなければならぬ。例へば資本家が勞働者を雇傭して物を生產するのに、勞働者と協力して社會的任務を行ふのであると考へるならば、うれは正當なる考である。然るに若し勞働者を道具に使ふて自己の富を作るのを目的とするならば、これ明かに勞働者の人格を無視したる考であるのみならず、社會の存立の爲に働くといふ自他の任務を忘れたるものである。夫故に吾々は各自に自己の性能を發現して、社會の一員としての任務を盡すのであり、又ら

の社會的任務は必ず社會の人々と協調を保つことによりて全ふせらるゝのであるから、他人の人格をどこまでも尊重する考を以て、世に立たなければならぬ。

吾人は自己の爲に他を犧牲にするといふことは、ゆめにも有つてならぬが、他の爲に自己を犧牲にするといふ場合のあることを覺悟せねばならぬ。これは自己の人格を尊重する自我實現主義と一見矛盾する樣であるが、實はより大なる自我を實現せんとするのであつて、社會的生活を營む上は、必ず生じ來るべき人心自然の要求である。親が子を養育する場合に、子の幸福の爲に親は自己の苦痛を辭せない。苦痛は元來人心の欲求に反するものである。然るに親が好んで苦痛を受けるのは、幸福を

受ける子を別人と考へずして自己の中に包容し、子即ち我なりと信ずるからである。即ち親の苦痛は、子を包容したる、より大なる自我の幸福に外ならぬのであるから、親が子の爲に自己を犧牲にすることは、親心の自然の發現であると謂はねばならぬ。そこで自己を犧牲にするといふことは、小なる自我の小なる利益を轉じて、大なる自我の大なる利益と成すことを意味するのである。國家の爲に身命を捨つる愛國の士は、國家を以て大なる自我と思惟し、國家の利害休戚を以て自己の利害休戚と考へて居るのであるから、小なる自我としては死んで居るが、大なる自我としては永遠に生きて居るのである。吾人が社會的任務を行ふに當りても、之と同樣の確信を有せねばならぬ。自己は社會の一部分であると

同時に、社會はまた大なる自己である。社會的任務を行ふ爲に、一時は個人的に不利益を受くることあるも、大なる自己なる社會が夫が爲に利益を受くるならば、個人的の不利益が形を變じて社會的の利益となつたのであるから、何等意とするに足らぬ譯である。小我より大我へと進み行くこと、これ又社會的生活を營む者の忘れてはならぬ所である。

五　人間生活と宗教生活

以上は倫理上より觀たる人生の理想であつて、人間生活の意義及び價値を肯定するものである。吾人は此理想を以て日常の生活を營まなければならぬ。最後に吾人は、此人間生活が宗教生活と如何なる關係を有す

るやを考へて見たい。世間には動もすると、人間生活と宗教生活とは全然別種のもの〻樣に考へ、宗教生活は普通一般の人間生活を超越して、或る特定の階級に屬する者、若くは特殊の境遇に於てのみ之を實行し得る如く誤解して居る人が多くある。これ强ち根據のない考ではない。何となれば、從來敎へられたる多くの宗敎、殊に佛敎の大部分が說く處の宗敎生活は、殆ど此人間性を沒却したる出世間的、超社會的のもので社會的生存を營む所の人間の實行に堪へざる所であるからである。現代人が斯の如き人間生活に卽せざる宗敎生活を以て、全く無意義に感ずるのは無理もないことである。然るに吾人は、こ〻に親鸞聖人によりて敎へられたる宗敎に於て、此二者の不調和を去り、人間生活と宗敎生活の

相卽を體驗することを得るのは、甚だ愉快に感ずる所である。

從來の佛敎は嚴格なる理性主義を奉じて、感情の欲求を禁遏することに骨を折つたものである。家を出で妻子を捨て、山中雲深き僧庵に隱れて禪觀を凝らすことは、殆んど宗敎生活の通則となつて居つた。親鸞聖人も初はこの宗敎生活に入つて、「蘿洞の霞の中に、三諦一諦の妙理を窺ひ、艸庵の月の前に、瑜珈瑜祇の觀念を凝らし」、以て自己を試練せられたけれども、「定水を凝らすと雖も識浪頻に動き、心月を觀ずと雖も妄雲猶覆ふ」の狀態であつた。斯の如き宗敎生活は、枯木寒巖の如き乾からびた人間であればいざ知らず、人間性の燃ゆるが如きものがあつては、到底堪へ得る所ではない。人間は畢竟「愛欲の廣海」に棲むものであり

「名利の大山」から遁るる能はざるものである。古の修學練行の聖者のいみじき態度を仰げば、元より恥づべく傷むべきことに相違ないが、如何せん人間の本性は之を人爲的に改造することが出來ぬ。この人間の本性を改めずして求むべき宗敎はないか、人間性の上に打建てられたる凡人の宗敎は那邊にか見出されざるか。親鸞聖人がこの中心の煩悶を重ねて、漸くにして辿り着かれたのが、如來救濟の宗敎である。

如來救濟の前には、老少男女、智愚善惡の差別はない、況んや在家出家の相違は何等問ふ所でない。唯如來が一切人類の救濟者として、無限の智慧と慈悲とを以て吾等に臨みたまふことを信じ、自己を擧げて如來救濟の御手にゆだねる。そこに吾等の心の上に展開する宗敎の新天地が

あるのである。この宗敎の新天地に達せられた親鸞聖人は、最早や山林の隱遁者でもなく、草庵の修道者でもない。家庭の父として子女を敎養し、民衆の指導者として人間的宗敎を說き、以て社會の一員としての任務を遂行せられた。聖人はりの人間生活と宗敎生活との相卽せる狀態を述べて、

超世の悲願きゝしより
われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねど
こゝろは淨土にすみあらぶ

と歌はれて居る。淨土にすみあらぶ所の心境は、生死の世界に於ける現

實の生活を彩りて、人間生活をうのせ〻宗教生活となすのである。

うも〳〵如來といふは、無限大の自我の最も圓滿に實現せられたるものである。吾等の自我は之を擴大して家庭全體と一致せしめ、更に之を擴大して、國家若くは社會全體と一致せしめ得るけれども、尙これ有限の世界に於てすることであるから、自我の大さには限界がある。然るに如來は無限の宇宙と一致し、うの中の一切衆生を我が子とし、我自身となしたまふのであるから、うの自我や宇宙と同じく無限大である。「法華經」に「三界は吾が有なり、うの中の衆生は吾が子なり」と說き「無量壽經」に「諸〻の衆生に於て、視ること自己の如し」と說けるものは正にこの意である。斯の如く如來は無限大の自我を最も圓滿に實現せら

れたる人格であるから、一切人類の救濟者として活動することを得るのであり、吾々も亦如來の子としてうの慈懷に抱かれ得るのである。

自我實現、自己擴張、これ實に現代人の叫びであるが、この叫びは人間性の必然の要求より出づるのである。この要求に覺醒して、自我實現の理想に向つて進まざる者は、何等動物と撰ぶ所なく、あたら貴重なる一生を醉生夢死に終ること〻なるのである。吾人は如來に救濟せられてうの慈懷に抱かれつ〻、自己の具有せる諸〻の性能を實現して、人間性の光彩を發揮するであらう。而して又絕大の自我に達せる如來の大心を憧憬して、一歩々々小我より大我に進展し行くであらう。これ吾人が親鸞教徒として世界改造の大舞臺に立つ覺悟である。（終）

大正九年四月一日印刷
大正九年四月十日發行

不許複製

著者　谷川義男

發行者　大阪市外天下茶屋天神通四丁目　上山善治

印刷者　大阪市外柴島三百六拾三番地　井上讓太郎

定價金拾錢

發行所　大阪市外天下茶屋天神通四丁目　親鸞主義普及會

28,
704

終